

近代初期英国の身体観と母親像の転回 : エラスムス 『新しい母』英訳版を中心に

野々村, 淑子
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1904339>

出版情報 : 教育基礎学研究. 2, pp.85-100, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

近代初期英国の身体観と母親像の転回

— エラスムス『新しい母』英訳版を中心に —

野々村淑子

はじめに

17世紀の英国は、母役割の系譜上重要な転換期をむかえていた¹。それは、女性によって「母の助言書」というジャンルの書物が数多く書かれ、また出版されたことにも現われている。一方では、「弱き器」という聖書の言葉に代表されるような女性像が強調され、女性たちの多くもその自己イメージを保持していた。しかしながら他方で、女性たちは、自らの「不完全さ」を世に晒すことについて多くの弁解の言を書き込みながら、自分の子どもの救済を願い、子どもたちに祈ることの重要性を助言したのである。

「弱き器」である女性が、子どもの魂を左右しうるような力をもつとはされなかった。少なくとも、そのように書かれた書物が多い。助言書を書いた女性たちは、そのことについて敢えて反論を試みようとはしていない。母の助言書において、子どもを教育するのは、母ではなく聖霊である。近代初期英国の母は、19世紀にイメージされ、その後の社会に母性として自然化されたような、幼児期の子どもに対する決定的影響力をもつ存在であるとはされなかったのである。しかしながら、助言書を書くことは確実に、母が子どもの魂の領域に近づくことを意味していた²。

本稿は、17世紀に英訳され英国に紹介された、エラスムスによる『新しい母』に注目し、その母親論を精査し、母親像の系譜における歴史的な位置付けについて考察することを目的としている。ここに表わされた母親は、同時期に出版、再版された女性たちによる母の助言書とは全く異質なイメージを伴っている。それは、書き手の性差によるというよりも、『新しい母』の有する人文主義的自然観の萌芽にその源をおくことができるだろう。

『新しい母』という題名にも現われているように、この書は、当時においては斬新な母役割を論じたものとして、書かれているとあってよい。ルネサンスを代表する人文主義者としての名にふさわしく、近代初期に書かれた文献に多くみられるような原罪を負う人間像、肉体や自然、世俗への嫌悪や忌避の観念は全くみられない。むしろ身体こそが、靈魂あるいは精神を宿す重要なものとして重要視される。そして、その身体の健康

に最も影響力のある産みの母親が、子どもの健やかな成長に留意すべきだという議論なのである。

ここに見られる身体観、精神観は、以後の医学や心理学などの西欧近代の学問や、その知識を前提とし一般化されるような幼少期の母子関係論の基層に位置付けられていくであろう。ただし本稿は、この一編の対話、しかもその英訳版のみから、その母子関係観を抽出したものである。エラスムスの如き多大な影響力をもった思想家の、ただ一編の作品から議論を展開することは無理があることは承知している。よって、西欧思想の系譜上におけるこの作品の位置付けができていないのはいうまでもない。またエラスムスという思想家の思想体系のなかにこの作品を位置付けることも、子ども観の研究との関連で示唆的に言及することにとどまっている。

むしろ本稿は、教育史研究において、エラスムスの作品のなかでは他のものほど著名ではない『新しい母』の内容を吟味し、それが英国で翻訳、出版された時代に書かれた他の母の助言書類と併せて検討することによって、近代初期英国における母親像のゆらぎを再現することにつとめたい。

1 『新しい母 あるいは産婦』の書誌と構成

エラスムス (Desiderius Erasmus, 1467-1536) による『新しい母 あるいは産婦』(以下『新しい母』とする) (*The New Mother; or Puerpera*) は、初版は 1526 年、『対話集』の一つとしてラテン語で出版され、1671 年に英訳された。

エラスムスの諸作品が英訳され、英国社会に浸透したのは、まずは英国国教会の牧師ウィリアム・バートン (William Burton, 1545-1616) の力によるところが大きい。バートンは、ピューリタン運動が盛んな地の聖職につき、彼らの思想に共感を示しつつも、国教会派にとどまり、説教を中心とする多くの著作により名をなした人物である³。バートンが最初に英訳したエラスムスの『7つの対話集』(*Seven Dialogues Both Pithy and Profitable*, 1606) では、カトリックによるエラスムス批判が、それほど根拠のないものであることを示そうとしたものだ、と前書きに記されている。新旧教徒双方の思想や行動を理解しつつ、しかし抗争において一方に与することのなかったバートンが、エラスムスの思想を英国の人々に紹介するために英訳したのがこの書物であった。その後、1671 年に『新しい母』を含む対話集 (*The Colloquies; or, familiar discourses of D. Erasmus...rendered into English*, H. Brome: London, 1671, trans. by H.,M., Gent.)

近代初期英国の身体観と母親像の転回

が英訳された⁴。さらに 17 世紀末から 18 世紀にかけて、学校の教科書等として多くの英訳本が出版された。近代初期の母親向け助言書を分析したウェインは、「17 世紀にエラスムスの助言書が翻訳されたことは、文化のなかで「新しい母親」像が展開していくことに寄与した」と述べている⁵。

『新しい母』は、母となった女性ファブーラに、母乳育や身体の手世などを勧める男性エウトラペウス（夫ではない）との対話から成っている。エウトラペウスの言をかりながら、ファブーラの、新しい母役割に対する抵抗感、違和感を消していきながら、最後にはファブーラがそれに説得されるような、わかりやすい筋立てとなっている。対話という形式であり、かつ章や節分割などはないにもかかわらず、主題の推移、展開が非常に明確である。

従って以下では、ほぼ『新しい母』の記述を追う形で、その主題を再現することにとめたい。それは、男性と同等の価値を女性に与えた自然の力を評価するところから始まる。その自然こそが、自分の産んだ子どもの身体の滋養のために、母乳を与え世話をする力を女性に与えたとして、母親の育児能力の本来性（自然性）を称え、その仕事の重要性を強調するのである。このような母子の身体的関係を重視するような考え方の根底には、身体と精神を二元的に把握し、身体を精神を宿すものとする「新しい」認識がある。『新しい母』における対話は、この新しい認識こそを議論の中心としつつ母役割の重要性に議論に至っている。このことは、このような認識が自明ではなかったことを物語っているといえよう。

2 自然が女性に与えた力

玄関にある白鳥の印をみて、赤ん坊誕生を知ったエウトラペウスが、ファブーラを訪ねるところから、この対話は始まる。ユーモアあふれる会話が進むなかで、まず二人の議論は、産まれた子どもの性別というテーマに絞られる。

エウトラ… 男の子が生まれたというのは、おめでたいですね。

ファブーラ なぜあなたは、女の子よりも男の子が産まれるほうが幸運だと思うのですか。

エウトラ… いやはや。ペトロニウス（ファブーラの夫の名：引用者）のファブーラ（今私は、私のファブーラとは怖くていえませんね）、あなたから先に、女の子よりも男の子が生まれて嬉しいと思った理由を教えてください。

野々村 淑子

さい。

ファブーラ 他の女性がどう思っているかはわからないけれど、私が今男の子が生まれて喜んでいるのは、神のご意志だからです。もし神が私に女の子を授けたら、私は女の子のほうが良かったと思うでしょう。

エウトラ… あなたは、神に女性が出産するのに立ち会うような暇があると思っ
ているのですか。

ファブーラ エウトラペルス、神は自分が創造したものを維持するには、殖やすのが一番いいですよ。 [CE : 269]

神から授かったがゆえに、男の子の出産を喜ぶファブーラに、エウトラペルスは、神が各々の出産する女性に絶えず付き添っているわけではないと主張する。国家や教会に起きているさまざまな事件を引き合いに出しながら、神が忙しくしているというのである。

神に言及しない説明を求めるファブーラに、エウトラペルスは、神なしでは説明できない、とした上で「神がクリスタルをくださる」のと、「ガラスの一片をくださる」のとでは、どちらがより神に感謝するか、という質問を投げかける。

ファブーラ あなたは、男性のほうが女性よりも生来 (naturally) 善良で強いと思っ
ているのでしょうか。

エウトラ… 私はそのように信じています。

ファブーラ 男性の権威においては、確かですね。だからといって男性は女性より
長生きしませんよね。病気から免れるようなこともないですよ。

エウトラ… そんなことはありませんが、一般的に力では勝っています。…
それに、男性が最初に創造されました。

ファブーラ アダムはキリストの前に創造されたのです。それに、芸術家は常に後
進よりも優れているといえますか。

エウトラ… しかし神は、女性は男性に従うべきと言っています。

ファブーラ 支配者は、単に支配しているからといって善良であるとは限りません。

[CE : 270-271]

このようにファブーラは、男性の優秀性を信じて疑わないエウトラペルスに対して、その根拠をことごとく論破することによって、男女が同等であることの正当性をたたみか

近代初期英国の身体観と母親像の転回

けるように確認していく。

この男女の同等性の主張は、女性の劣等性のイメージを払拭するとともに、自然への肯定的イメージを導きだすための前触れなのである。「弱き器」、劣った性という女性観は、近代初期英国において強調され、女性たちの活動を制限していた⁶。母の助言書が女性たちによって書かれた少ないテーマの一つだったのには理由があったのである。彼女たちは、「母の愛ゆえに許されるだろう」として、控えめに子どもの救済についての文章をのこした。D. レイは、子どもの教育という主題であれば、「全ての畏れをさておき、私は自分の不完全さを世に晒すことに挑」もう、と書いている⁷。これに代表されるように、当時の女性たちは、ものを書き、世に問うような力は無いことは重々承知しているが、子どもへの愛ゆえに、このことを許してほしいという論法を使った。

エラスムス『新しい母』における、ファブーラによる女性の価値の主張は、女性たちの慎ましさと対照的であることは明らかである。エウトラペルスをして、「言葉による戦いでは、7人の男性によっても、1人の女性に勝てないでしょう」と言わしめるほど、ファブーラは饒舌に、女性の優秀性、男性に劣ることのないことを説得的に語る。

そして先にも触れたように、女性にこのような力を与えたのは「自然 (Nature)」である。

ファブーラ　そうですよ。自然（傍点および強調は引用者による）が、この武器（言葉）によって私たちを武装させたのです。あなたたち男性が舌がまわらないというわけではないのですけれど。

エウトラ…　たぶんそうですね。ところで、坊やはどこにいるのですか。

ファブーラ　隣の部屋にいますよ。

エウトラ…　そこで何をしていますのですか。まさかキャベツでも料理しているとか。

ファブーラ　御冗談ですか。彼は乳母と一緒にいますよ。

エウトラ…　あなたはどんな乳母のことを言っているのですか。彼は、母親以外に乳母がいるのですか。

ファブーラ　いてはいけないのですか。普通の習慣ですよ。

エウトラ…　あなたは、良き習慣というものを、普通の人々という悪い権威によって語るのですか、ファブーラ。罪深きことも普通であるし、賭博も普通、売春も普通、ペテンや酔っぱらい、愚かな行いも普通のこ

野々村 淑子

とですよ。

ファブーラ 私の友達が、私のように若い人は母乳を与えるのを手伝ってもら
べきと考えて、助言してくれたのです。

エウトラ… しかし、もし自然があなたに子どもをもつ力を与えたのであれば、
疑いなくその自然が、母乳を与える力をあなたに与えています。

ファブーラ ええ、たぶんそうですね。[CE : 272]

女性に言葉という武器によって力を与えた「自然」が、同じように、自分の子どもに母
乳を与える力を与えているということである。

この「自然」という言葉に対する意味付け、すなわち自然観において、エラスムスの
母親論は、女性による助言書と決定的に区別されるといえる。エラスムスの議論におい
て、女性に、その優秀性とともな、子どもを養育する力を与えたのは「自然」である。
D. レイによる、次のような自然観とは対極的にある。

人間は、生まれながらにして俗世的であり (man being earth by nature)、そし
て一般的に俗世の事柄を愛してしまう傾向にある (generally inclined to love
earthly things) からです。そして彼 (サタン) は、この俗世への愛 (this earthly
affection) のなかに、人間を容易くおぼれされてしまうのです⁸。

敬虔なプロテスタント信者として、レイは、あくまで人間は「自然」によって原罪を負
っていることを強調する。そして、身体 (Flesh) および「俗世への愛」と共に、聖性
に反する否定的なものとして「自然」を論ずる。

このような自然観とは対照的に、エラスムスは、子どもに対する母の関係性を、身体
を通して確かなものとする「自然」の威力を評価する。

エウトラ… あなたは、子どもの母親の名を、他の女性に半分以上受け渡してい
るようなものですよ。

ファブーラ 何を言っているのですか、エウトラペルス。私は息子を分けるつも
りはないですよ。私がたった一人の、完全なる彼の母親です。

エウトラ… いいえ、ファブーラ。自然は、このことではあなたを認めないでし
ょう。大地 (earth) が、なぜ普遍なる親だといわれるかわかります

近代初期英国の身体観と母親像の転回

か。それは、多くのものを産み出すからですか。そうではないのです。本当の理由は、それが産み出したものを、自ら養育する（nourish）からなのです。…どんな種類の生き物でも、自分の子どもを養育しないものはいません。…育てるのが面倒だからといって、子供たちを捨てるように言う人ほど残酷なものがあるでしょうか。[CE : 272-273]

エウトラペルスは、養育の必要性を説いていく。そして、「自然」から与えられた母乳育によってこそ、子どもの身体的健康と力（bodily health and strength）を保つことができることを強調するのである。この身体への注目こそ、女性による助言書が前提としているような、キリスト教的身体観には見られない点である。

3 魂の家、魂の楽器としての身体

キリスト教的身体観において、肉体（Flesh）は、悪魔が支配する領域であり、罪に染められたものとして、忌避される。先に引用したレイの言葉にも現われている。しかしながら、レイの世界観のなかで、身体（Body）そのものが明確に表現されているわけではない。他稿で論じたように、「聖霊が子どもを教育する」、あるいは「キリストが子どもの中に形づくられる」といわれるとき、ここにあるのは、皮膚という境界によって明確に境界づけられ、機能と構造を有した身体ではない。流動的で、意味があふれているような身体観である⁹。

翻って、エラスムスに目を移してみると、身体と魂（精神）が区分され、魂を宿し機能を有するものとして、身体が明瞭に言及されていくのである。子どもの身体の健康のために母乳育を勧めるエウトラペルスに対し、ファブーラは以下のように反論する。

ファブーラ 息子の精神（mind）さえ私たちが望むようになってくれたら、彼の身体については、さほど私は気にしていません。

エウトラ… 誠実なる答えですが、疑わしい知恵ですね。…

鋭い視力を必要とする人が、毒麦や玉葱を避けるのはなぜですか。

ファブーラ それらは目を痛めるからです。

エウトラ… 知覚するのは、精神ではないのですか。

ファブーラ ええ、死んだ人は何も見えないですから。でも大工が悪い斧を使っ

野々村 淑子

て何ができるでしょうか。

エウトラ… そうなのです。だから、身体は精神の道具 (instrument) ですよ。

ファブーラ そうですね。

エウトラ… もし、身体が傷ついたら、精神は働かないか、働いたとしてもどこかなくしか働かないですよ。[CE : 273-274]

エウトラペルスは、アリストテレスの名を引き合いにだしながら、「道具 (instrument)」あるいは「器官 (organ)」としての身体の重要性を説得するのである。

ただし、キリスト教、プロテスタンティズムの身体観とは袂を分かつようなエラスムスの身体観ではあるが、18世紀以降に広まるような解剖学的視線を伴った身体観¹⁰を有しているわけではない。身体を霊気 (spirits)、あるいは気 (vapours) が環流するような、ガレノスの身体観¹¹を、以下のような記述からは見て取ることができるだろう。

エウトラ… こめかみを強くたたかれたり、頭の後ろから倒れた人は、死んだようになって、意識が全くなくなりますよね。…

これは、知性や意志、記憶の器官が、頭蓋骨のなかにあって、目や耳、他のどんなものよりも鋭敏だからです。私たちの身体には極度に精微な霊気が潜んでいるのです。

ファブーラ それは、食物や飲物によって影響を受けるのですか。

エウトラ… そうですよ。

ファブーラ しかし脳は胃とはだいぶ離れていますよ。

エウトラ… 暖炉から遠く離れた煙突の先端のように、といえますね。あなたがそこに座っても熱を感じることができるでしょう。…

霊気 (spirits) や気 (vapour) が、胃から脳へとのぼるものと、精神の器官へとのぼるものとが区別されるのです。もしそれが粗雑で冷たければ、胃へと戻ってしまうでしょう。[CE : 275-276]

エウトラペルスは、このような「霊気」の流れと、「体液 (humour)」の流れとを並行的に語りながら、身体、そして身体の栄養となる食物や飲物の、精神にとっての重要性を説いていく。「ワインを飲む人は記憶力に乏しい」、あるいは「軽い霊気を含む食物をとる人は、愚鈍な知力しかもたない」などの例が、その論を補強していく。

近代初期英国の身体観と母親像の転回

そして、精神が知覚可能かどうかという議論のあと、目に見える身体と、そこに住まう精神というとらえ方、あるいは精神の衣服としての身体、という比喩が論じられることになる。

ファブーラ 身体は、精神の道具というより、住まい (dwelling) ですね。

エウトラ… 住まいに備えられた道具と呼んでもいいですよ。実は哲学者たちはさまざまな言い方をしています。身体は魂の衣服 (garment) と呼ぶ人もいるし、道具、あるいはハーモニーという人もいます。どの言葉であっても、精神の活動は、身体の状態によって決められているということには変わりありません。[CE : 276-277]

このように、精神の衣服、道具、住まいといった喩えを身体に付与しながら、精神にとっての身体の状態の大切さを論ずるのである。

4 身体への配慮と母役割の重要性

2においてみた、自然への肯定視、そして精神の住みかとしての身体とそれへの滋養の重要視は、以下にあるように、母親の母乳育および新生児の世話の必要性の強調へと収斂していく。

ファブーラ もし身体が精神 (mind) の住む場所であるとしたら、私がみるところかなりひどい家に住んでいる人が多いですね。

エウトラ… そうなのです。文字通り雨漏りをし、暗く、風は通らないし、煙たくて……とにかくひどい家がありますね。カトーが言うように、快適な住まいは、幸福に最も必要なものです。

ファブーラ もし家をかえることが許されたら何の不平もでないでしょうね。

エウトラ… しかし (身体と精神) が分けられることは許されていないのです。でも、たとえそれが許されていないとしても、術とケアによって、快適にすることはできるのです。窓を換え、床を上げ、壁を張り替え、タペストリーを飾り、火や薫蒸消毒によってきれいにすることはできません。年老いた身体はすでに破滅に向かっていて、これはとても難しい

野々村 淑子

でしょう。しかし、若い身体は、生まれたすぐから適切なケアをうけるということが、重要なのです。

ファブーラ つまり、あなたは母にメディカルな看護者 (medical nurse) にもなってもらいたいのですね。

エウトラ… その通りです。食物や飲み物、運動、睡眠、沐浴、オイリング、マッサージ、衣類の選択と規則化は、母親の仕事と思います。どれほど沢山の人が、乳母 (nurse) の不注意な扱いによって病気や不具になってしまっていると思いますか？

中略

エウトラ… あなたはもう、あなたの赤ん坊に立派な奉仕をすることができるでしょう。(楽器の弦を外気に触れさせてゆるんだり張りすぎてこわれたりするののないようにするのと同じように)、彼の精神の楽器 (his mind's instrument、つまり身体) をより良く調律し (well tuned)、できる限り傷みを少なくするように見守ることで。…成長 (upbringing) は、私たちのなかにこのような傾向を植え付けるのです。[CE : 278-280]

ファブーラは、エウトラペルスの、靈魂は人間も植物も動物も虫さえも同じであるという見解に異論を唱えながらも、アリストテレスの議論を根拠に反論されるのである¹²。

そして最終的には、「自然が義務としているような…母乳育」をせず、乳母に預けてしまえば、「彼 (ファブーラの息子) は、話ができるようになったら、あなたのことを半分の母 (half-mother) というでしょうね」と言われ、納得することになる。ファブーラは、「まずは子どもの健康について注意し、それから、身体が強くなったら、モラルとスピリチュアルな成長について注意しなさいということですね」、ということを確認し、対話は終わる。

このような議論からは、D.レイらのような、身体観、罪に染められた身体への忌避と、身体と遊離した靈性への執着はみられない。身体は、靈魂、精神の家、あるいは道具、そして楽器、という位置づけをされ、それゆえに、母乳育、乳幼児期の身体の世話が、子どもの人生にとって重要なものとされていく。

ただ、エラスムスによってのみ母乳育が推奨されたというわけではない。女性による助言書のひとつ、『リンカーン伯爵夫人の育児室』(Lincolne, E., *The Covntesse of*

近代初期英国の身体観と母親像の転回

Lincolnes Nvrserie,1622) は、母乳育の重要性を説いているという点で、このエラスムスの議論と同じようにとらえられている¹³。しかし、そこでは、母乳は「神から母に与えられた祝福」、「神から直接与えられた摂理」であり、それを与えるのは、母の義務であり愛そのものである、ということが述べられている¹⁴。つまり、身体観において、エラスムスのものとは全く異なり、キリスト教的身体観、聖性との繋がりを母乳にみているという意味で、レイの言説に近いと思われる¹⁵。ただ、自分の子どもを母乳育で育てなかったことへの後悔から書かれたこの書物には、18人もの子どものうち2人しか健康に育たなかったこと、子どもたちのなかの1人か2人は、乳母の怠慢 (default) のせいで死んだのではないかと書かれている¹⁶。徐々にエラスムスのような考え方を受け入れる用意ができてきたのかもしれない。

しかし、もちろん、エラスムスもまた、キリスト教の考え方のなかに、アリストテレス等のギリシャ哲学の理論を融合させようとしたことは間違いない。聖書の一節「しかし婦人は、子を産むことによって救われる」（「テモテへの手紙 一」第6章第15節）、およびそれに続く「もしその子どもたちが信仰を保ち続けるならば」という文言を、説得に用いている。つまり、産むことだけではなく、産んだ子どもを育てることによって、救われるという聖書の議論を引き合いにだしているからである¹⁷。

ただし、上記にみてきたように、エラスムスによる母親論は、レイによる『母の祝福』等に比べ、圧倒的に聖書への参照が少ない。アリストテレスに代表される古典古代の学を参照しつつ、平易に母役割の重要性を説くのである。ユーモアあふれる対話という形式そのものも、レイやジョスリン、リンカーンら女性による敬虔な助言書とは一線を画している。そして、精神、すなわち「モラルとスピリチュアル」の領域は、「身体の健康」に伴うものであり、まずは身体の健康を優先すべきであるという結論に達するのである。レイ等の「聖霊が教える」という認識とは、全く逆の人間観にたっているといえるだろう。そして、母乳を与えられたかどうかによって子どもが母であることを認め、その母乳如何、誕生後の身体の世話如何によって子どもの精神が決定される形で、母親役割の重要性が説かれているのである。

おわりに

本稿は、17世紀に英訳されたエラスムスの『新しい母』の議論を通して、近代初期英国において転回しつつあった母親像の一側面を明らかにしたものである。

ヒューマニストとしての名にふさわしく、まずは「自然」の肯定視、「自然」の力によ

って与えられた女性の優秀性(すくなくとも男性にひけをとることはないという考え方)を確認するところから対話が進められる。そして、「弱き器」としての女性像を否定するような「自然」こそが、母乳育と身体の世話という大切な仕事を母に授けたとして、その重要性を説く。

近代初期の英国で多く語られた原罪に染められた人間観においては、自然とは、罪を背負った肉体そのものであり、聖性と交わることのできる魂とは対極にあるとされ、否定視されていた。女性たちが書いた助言書においては、このような自然観が優勢である。

しかし、エラスムスは、アリストテレスの霊魂論に倣い、精神と身体を区分し、精神の宿る身体は健康こそ配慮すべきであり、自然こそが、その配慮の力が女性に与えた、という。産むこと、そして母乳を与えること、世話すること、こうした身体を通じた母子関係の正当性と重要性を、自然という権威に求めたといえる。ここには、レイらが強調する自然への忌避観は全くない。

エラスムスの議論において、母親は、自分の産んだ子どもとの身体的、かつ精神的な密接かつ直接的な関係性のなかに、確実におかれている。「聖霊が教育し」、「祈ることを勧める以外何もしない」ようなレイの母親像とは、全く異なる。そして、エラスムスの考え方が、その後の母子関係の基層に位置付けていることは推察されうることであろう。17世紀英国社会において、母親像は、内に相違やずれを抱え込みながら、子どもとの密接な関係性に向かって転回しつつあったといえよう。

エラスムスの子ども観について、アリエスのいう近代的孩子観の成立過程と照らし併せながら論じたものとして、大川洋による論考¹⁸がある。大川は次のようにいう。「子どもの発見者」として一般に認められているのはルソーであるが、子どもに固有な性質は、エラスムスにおいて既に発見されている。エラスムスの子どもについての言説は、子どもとはどういうものかということが初めて意識的に問題として取り上げられるようになった時の言説であるから、エラスムスは西欧近代における言説のレベルでの最初の「子どもの発見者」の一人として位置付けられるであろう。エラスムスの著作は、印刷術の発明によって広く普及したため、彼の子ども観は社会生活の様々な面に浸透してゆき、民衆のあいだに内面化されていったのではないかと推察される¹⁹。エラスムスの思想は、「子どもに固有な性質」に注意を払い、「特別な配慮」を施す点で、後に支配的となる子ども観のいわば先駆けと位置付けられる、ということである。

本稿では、子ども観の特質ではなく、新しい母親像を展開する議論において、それを可能とする身体観、自然観に注目した。ルネサンス期に特徴的なコスモロジカルで流動

近代初期英国の身体観と母親像の転回

的な身体論を展開しつつも、『新しい母』は、確実に母親の子どもとの身体的精神的な結びつきへと確実に歩を進めている。この母親像は、大川の指摘する、子どもへの特別な配慮を論じた嚆矢としてのエラスムスの子ども観に、重なるものであるということができる。子どもの身体への特別な配慮を通して、その精神の健康に心を配るように勧められるのは、その子どもを産んだ母親である。このような議論の前提には、身体と精神を区分したうえで、身体を、精神の「住まい」とも言いうるような精神への決定的影響力をもつものとする心身二元論があることは明確である。

ここにおいて重要なのは、産んだということだけではなく、母乳によって滋養し、世話をするという身体的なつながりによって、母であることを子どもにも周囲にも初めて認めてもらえるような母親観が発明されていることである。人生のごく初期において、母親が子どもの精神の健全性を決定する最初の関係性をもつのだという思惟が、ここに明確に現われているといえよう。「自然」への肯定的評価が、キリスト教的な女性の劣等性についての認識を否定するとともに、精神を宿す身体への配慮を重要視し、ひいては女性を<産む身体><育てる身体>をもつ存在として第一義的に規定していく考え方を導き出したことが、確認できたのである。

このエラスムスの母親論が「人間形成を決定する幼少期の母子関係」を発明した最初のものだということは、もちろん言えない²⁰。ただ、次のようにはいえるだろう。以上のような新質な母親論である『新しい母』は、17世紀、女性たちによる、聖霊によって導かれたキリストとの霊的融合を教育そのものであると規定し、母親は祈ることのみにとどまっているべきとされた母親論と、ほぼ同時期に英国社会に受け入れられた。つまり双方の考え方が共存していたのである。このことは、近代初期の英国における母親像についてのゆらぎを示すと共に、当時において全く異なる人間像、教育像、またそれを規定する世界観において、母と子どもの心が向き合っていく道筋が語られ始めていたことを示すものといえるだろう。

〔付記〕

この論文は、平成 15・16 年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究課題名「近代初期英国の女性と教育の関係構造に関する基礎研究：コンダクトブックを史料として」の一部である。

¹ 近代初期の母の教育役割については教育史研究における、チャールトンの研究がまず挙げられる。チャールトンは、アリエスらに対抗する形で、前工業化社会においても「教育する母」は存在したということ、ひとまずさまざまな史料において指摘した (Charlton, K., 'Mothers as Educators', *Women, Religion and Education in Early Modern England*, Routledge, 1999)。チャールトンが掘り起こした史料のなかに、日記や手紙などとともに、母の助言書も含まれている。チャールトンは、近代初期の母役割の存在について、なかでも宗教改革期の宗教教育において重要な役割を果たしていたことを明らかにした。しかし、上記にみたような関心からの研究であったため、母親像、母役割イメージの系譜において近代初期を位置付けているわけではない。また、母の助言書の多くが女性によって書かれたこと、近代初期において女性がものを書くということ自体が非常に画期的なことであったことから、文芸批評の分野で、女性作家に光をあてようとする研究、あるいは復刻版やアンソロジー編集などが盛んに行われている。トラビツスキーによる研究 (Travitsky, B. S., 'The New Mother of the English Renaissance: Her Writings on Motherhood', in Davidson, C. N., *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*, Frederick Unger, 1980) が、この動向の先端を担っているといえる。注 4 で言及するウェインの研究も、この系統に属している。チャールトン、トラビツスキーの研究を含め、研究動向については、野々村淑子「近代初期英国における母親像の転回と教育—研究課題の整理のために—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 6 号 (通巻第 49 集)、2004 年

² 17 世紀初頭に出版された女性による母の助言書のなかでも代表的とされる『母の祝福』については、野々村淑子「近代初期英国の霊性と母親像の転回— D.レイ『母の祝福』(1616)を中心に—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 7 号 (通巻第 50 集)、2005 年。

³ *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004

⁴ 本稿では、対話集の英訳版 *The Colloquies of Erasmus*, trans. by Craig R. Thompson, Chicago UP, 1965 を使用した (本文中において引用する際は、[CE : 頁数] とする)。注 5 に記したように、エラスムスの対話は非常に多数出版されており、英訳本について英国研究者も混乱している。上記の現代英訳版の訳者トムソンによれば、1671 年の英訳本はラテン語からの忠実な訳となっていない。書誌に関しては、更に精査が必要である。

⁵ Wayne, V., 'Advice for women from mothers and patriarchs', n.30, in Wilcox, H.,

ed., *Women and Literature in Britain, 1500-1700*, Cambridge U.P.1996, p.61.

ただし、ウェインが『新しい母』が英訳されたとして言及しているエラスムスの英訳本は、本論でも触れた 1606 年初版のウィリアム・バートンによる『7 つの対話集』である。しかし、そこには『新しい母』は掲載されていない。

⁶ Fraser, A., *Weaker Vessel: Woman's Lot in Seventeenth-Century England*, Arrow Books, 1999 (first published in 1984); 「…妻たちよ、自分の夫に従いなさい。…夫たちよ、妻を自分より弱いものだとわきまえて生活を共にし、命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません」 「ペトロの手紙」第 3 章第 1-7 節『聖書 新共同訳』（日本聖書教会、1989 年、以下聖書の和訳はこの訳書による）（強調は引用者による）。

⁷ 'TO MY BELOVED Sonnes, George, Iohn, and William Leigh, all things pertaining to life and godliness.' in Leigh, Dorothy, *The Mother's Blessing: or the godly counsaile of a gentlewoman, not long deceased, left behind her for her children: containing many good exhortations, and godly admonitions profitable for all parents, to leave as a legacy for their children*, London, for John Budge, 1627,

⁸ Leigh, D., *op.cit.*, p.174

⁹ 野々村、前掲論文、2005 年。近代初期の人々の身体観については、以下の論考に詳しい。Juster, S., 'Mystical Pregnancy and Holy Bleeding : Visionary Experience in Early Modern Britain and America', *The William and Mary Quarterly*, 3rd, Ser., Vol.57, Apr., 2000. また、近代以前の身体観の歴史については、T.ラカー『セックスの発明：性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎、1998 年 (Laqueur, T., *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*, 1990) を参照。

¹⁰ 18 世紀の解剖学の発明以降、身体の中の各器官が分割され、それぞれの形態と機能を問題とするような身体観が、医学領域を席卷していくといわれる。ラカー、前掲書を参照。

¹¹ ラカー、前掲書、主として第一章を参照。また、このような身体観が優勢であったことは、17 世紀に沸き起こった前成説論争にもみることができる。出生における人類の祖が、卵子にあるか精子にあるか、という論争である。この論争を精査したコレイアは、精子派の聖職者や医学者、生物学者が「精液の霊気」という概念を用いたことは、彼らの身体観において、「気 (spirit)」が重要な役割を果たしていたことを指摘している。

聖母マリアの処女懐胎教義も、神の「靈氣」によるものという説が説かれたという。クララ・ピントーコレイア『イヴの卵: 卵子と精子と前成説』白揚社、2003年 (Pinto-Crreia, C., *The Ovary of Eve*, Chicago UP., 1997)

¹² エラスムスは、かぶと虫と人間の靈魂は、靈魂があるということについては同じだけれども、違うものであるし、交換はできないということの根拠に、「器官 (organ) が無い」という。「かぶと虫が歌ったり話したりできないのは、そうすることができるような器官がないからです」。アリストテレス『靈魂論』には、「技術は〔それぞれの目的のために独特な〕道具を使用し、靈魂は身体を使用しなければならないのだから」(第三章 b 20) とある。山本光雄訳「靈魂論」『アリストテレス全集 6』岩波書店、1988年(第3刷、初版1968年) (Aristotle, *De Anima* 344/5?)

¹³ Travitsky, *op.cit.*, p.36

¹⁴ Lincolne, E., *The Covntesse of Lincolnes Nvrserie*, Oxford, Printed by John Lichfield, and James Short, Printers to the famous Universitie, 1622

¹⁵ 17世紀の授乳については、Crawford, P., "The Suckling Child": adult attitudes to child care in the first year of life in seventeenth-century England', *Continuity and Change* 1(1), 1986を参照。

¹⁶ Lincolne, E., *op.cit.*

¹⁷ この文言について、エラスムス著作集の英訳版の解説者注には興味深い点が指摘されている。ウルガタ聖書(聖ヒエロニムスが4世紀末に翻訳したラテン語訳聖書)では、この「信仰を捨てない」という動詞の主語が単数になっている。つまり、この文章の主語は母である。報告者が参照した『新共同訳』には「しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって…」と訳されている。しかし、エラスムスは、ギリシャ語版においては主語が複数になっていることから、「信仰を保ち続ける」のは、「母」ではなく「子どもたち」である、と解釈した。そしてギリシャ語版を参照していない教父たちを非難した、ということである。Collected Works of Erasmus. Translated by Mynors, R.A.B, Thomson, D.F.S., and Ferguson, W.K., Tronto UP, 1974

¹⁸ 大川洋「エラスムスの子ども観」『教育哲学研究』第67号、1993年

¹⁹ 同上論文、68-69頁。

²⁰ 「人間形成を決定する幼少期の母子関係」の歴史化という仕事が、教育学において急務であることについては、野々村、前掲論文(2005年)の「はじめに」を参照。